

# 電気で加熱 小菅の湯

## 原油高騰 脱ボイラー

原油価格の高騰のおおりの受け、負担が増えた燃料代を節約するため、小菅村の温泉施設「多摩源流 小菅の湯」が6月末から、温泉の加熱に電力を使うようにした。おかげで経費を前年に比べて半分にまで減らすことができた。

同施設では、約2キロ離れた源泉から引いた温泉を加熱して使っている。6月下旬から稼働を始めた電力を使ったシステムでは、33度の温泉を80度まで加熱してタンクにためる。浴槽に入れる際には、加熱した温泉とぬるい源泉を混ぜている。浴槽内の温度は常に41度前後に保たれているという。

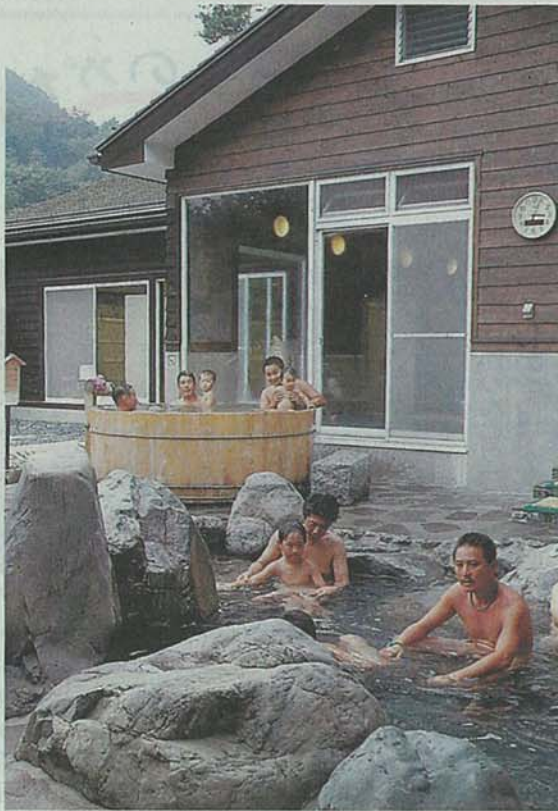
また、シャワーで使った湯や浴槽からあふれ出た温泉、クーラーから出た熱も利用して、タンク内の温度を下がりにくくする工夫もしている。午後10時から翌朝8時までの深夜電力も利用して電気代

## 経費半減、環境にもやさしく

を節約している。

同施設は、それまで重油と灯油を燃料にしたボイラーで温泉を熱していた。昨年7、8月の場合だと同施設でかかっていた燃料代は、重油と灯油を合わせてそれぞれ約110万、120万円だった。しかし、電力に切り替えた今年7月は54万円、8月は58万円と半分ほどになった。総支配人の黒川文一さん(50)は「燃料代がかさむこれからの季節は、もっと節約ができるのでは」と期待する。

燃料代だけでなく、ボイラーの修理費も、ここ5年間は年に70万円ほどかかっていただけに経費節減の効果は大きい。しかも電力に切り替えたことで、二酸化炭素の排出量も7割ほど減ったという。黒川さんは「環境面にもやさしいので、多摩川源流域の村らしい取り組みとしてアピールができる」と話している。



週末は多くの観光客でにぎわう「多摩源流 小菅の湯」。温泉の加熱に電力を使うようになってからも温度は41度前後に保たれている＝小菅村